

# 「<当事者>の語り」の意義と課題

— 不登校経験の言語化をめぐる —

貴戸理恵

## 1. 「<当事者>が語る」とはどういうことか

近年さまざまな社会問題の現場で、「当事者」という立場、あるいは「当事者の視点」といわれるものの重要性が指摘されている。

例えば、中西正司と上野千鶴子は、当事者の主体性や権利を重視し、当事者の視点から問題を語りなおすいとなみに着目して、「当事者主権」(中西・上野[2003])を主張する。中西・上野は、障害者、女性、高齢者、患者、ゲイ&レズビアンなど当事者たちによる運動と学問と事業の融合した活動が成熟を見せていること、それらが互いに結びつきうる共通性を有していることなどを主張し、これらに「当事者学」という総称を与える。中西・上野のいう「当事者学」の要素は、①担い手の当事者性の重視、②運動的立場の表明、③既存の専門知の相対化という3点にまとめることができると思われる。

第一の点は、研究主体の位置性に関するものであり、それまでもっぱら研究の「客体」とされてきた当事者が、研究する「主体」として中心的な役割を果たすことを重要視することを通して、当事者の自己決定権や自己定義権といった主体性を回復させることである。第二の点は、研究そのものの政治性・党派性に関するものであり、当事者にとって生きやすい社会の構想という明確な「目的」を持ち、運動的な立場を表明しながら、新たな権利の獲得や、自分たちのニーズを満たすための諸活動を行っていることである。第三の点は、成立の歴史性に関するものであり、「普遍」とされた専門知や「多数」

とされた価値観の中で当事者が価値を貶められ、歪められてきた経緯を重視し、既存の専門性や権威に対して変化を迫りながら、時に独自の専門性を構築してゆく態度である。

しかし、そもそも当事者とはいったいどの人びとを指すのか。また、「当事者が語る」とはどういうことなのだろうか。これらのことは、実際には「当事者学」が前提するほど自明の事柄ではないように思われる。個別の社会問題の現場では、誰が当事者であり誰が当事者でないのかの線引きは常に困難であり、当事者が語るこの意味は一義的には確定されがたいからである。

「当事者学」は、当事者とされる人びとが「当事者である自己」に徹底してこだわり、「当事者として語る」ことの要請を引き受けたところに立ち上がった。そこにおいて「当事者とは誰か」「当事者が語る」とはどういうことか」という問いは、おそらく抱かれながらも、「当事者が語る」ことのせっぱ詰まった必要性の前に、二次的なものとして考察を先送りされてきたのではないだろうか。あるいは、当事者とされる人びとの「今・ここ」にある具体的な「生きづらさ」に懐疑を差し挟みかねないものとして、問うことを回避されてきたのではないだろうか。しかし、「当事者」の「実態」や「本質」を想定しない立場は、必ずしも「当事者が語る」ことに積極的な意味を見出す「当事者学」の立場に敵対的である必要はない。むしろ、当事者とされる人びとの利益を求めるとして、こうした

考察を経由することはとても重要なのではないだろうか。

このような関心に基づき、本稿では、ある社会問題を「当事者の視点から語りなおす」とはどのような事態なのかを、事例に即して考えてみたい。

## II. 物語論の批判的検討

もっとも、こうした「当事者とは何か」「当事者が語るとはどういうことか」という点を主題的に取り上げた研究は既に存在している。物語論と呼ばれる領域である。

物語論によれば、自己は自己について語ることによって構成される。浅野智彦がいうように、「まず『私』がいて、ついでそれについて私が語るというのではない。そうではなく、自分自身について語るという営みを通してはじめて『私』が産み出されてくるのである」(浅野[2001: 6])。自己をめぐるあらゆる出来事は、それ自体では無数の断片の寄せ集めにすぎず、一貫性と完結性を持つ物語としてまとめあげられてはじめて、同一性の根拠としての意味を持ち、自己をかたちづくる。したがって、自己は自己物語を書きかえることによって変化に開かれているとされる。

ここでは、「語る自己」は語り以前に存在する自明の前提ではない。「当事者学」の「語る自己」が「当事者である私」という確固とした一人称的な存在であったのに対し、物語論における自己は常に未完の流動的な存在であり、そこでの語りは三人称的である。

こうした物語論の考え方に立脚し、「本人による語りなおし」を通して治療行為を行う実践がナラティブ・セラピーである。ナラティブ・セラピーでは、支配的な物語によって語られていた現実を、クライアント本人の現実感に即して語りなおすことによって、クライアントにとって「より生きやすい」ものへと積極的に構成

しなおしてゆくことが目指されている。

社会問題といわれるものの中でも、当事者とされる人びと以外の行為者によってもっぱら語られてきた対象において、こうした視点は特に重要である。そのひとつとして、不登校とよばれる事態がある。不登校者のような当事者とされる人びとが新たな物語を語ることによって、それまでの支配的な物語では「語り得ないもの」(浅野[2001])とされていた事柄を語れるようにしてゆくことは、医者や専門家、教師、親といった非当事者による代表/代弁を拒み、不登校者本人の主体性agencyを回復させる上で欠かせないプロセスになる。「語り得ないもの」とは、浅野[2001]によれば、「まさに自己物語のただ中に現れてくるようなものであり、自己物語が達成しようとする一貫性や完結性を内側から突き崩してしまうようなもの」である。「語り得ないもの」を隠蔽することによって物語は完成するが、それは常に物語の内において、一貫性や完結性に揺さ振りをかけようとねらっている。

もっとも、自己に対して物語が先行すると考える物語論的アプローチのもとでは、「語り得ないもの」を語るための「よりよい物語」は、また別の「語り得ないもの」を作り出すことと同時にしか成立しない。支配的物語に対するオルタナティブの提示として創出された対抗的物語であっても、反復され、流通する過程で、もうひとつの支配的物語となり、そこから外れるリアリティを排除してしまう可能性からは自由ではないのである。

セクシュアリティに関する人びとのおびただしい語りを分析したPlummer[1995=1998]は、ゲイのカミングアウトのストーリーやレイプ被害のサバイバーのストーリーなどが互いによく似通っていることを指摘し、対抗的物語が新たに定型化し抑圧に転じる可能性を示唆した上で、次のようにいう。

解決はないのかもしれない。残されているのはストーリーの増殖であり、まだ語られていないストーリーを認め、新しい余地をつくることである。……どうも必要なことは、これまで成長している一連のストーリーをしっかりと聞き、それらを一貫した全体的なナラティブの構造のなかに位置づけたいという欲求にかられないような感受性を養うことのようにだ(Plummer[1995=1998: 352-353])。

Plummerが取るのは、物語からの脱出(=「解決」)を目指すことなく、常に新たな物語を創出し続けることによって、物語ることが不可避にはらむ抑圧を、そのつど先延ばしするという戦略である。それは、自己に対して物語が先行するという物語論的アプローチを最も徹底させた解決策だといえるだろう。

しかし、こうした戦略は、当事者といわれる人びとにとって物語ることが持つ意味を考察する上では、見過ごすことのできない限界をはらんでいるように思われる。なぜなら、これらの人びとは、実際の問題の場においては、物語ることから一方的に放逐されているばかりではなく、他の行為者の物語を押し付けられると同時に、逆に自らの物語を語ることへと追い込まれている存在であり、そこでは「よりよい物語」の創出の要請そのものが、自己語りの強迫を通じた主体化の抑圧となりうるからである。

当事者とされる人びとと「物語ること」との関係は、単純ではない。事実、先に挙げた不登校の事例においても、「当事者」たちは、自己を同定する物語を語る場合もあれば、運動的立場から戦略的な物語を語る場合もあり、また「不登校の理由を聞かないで」「不登校について語らせないで」などのメッセージを通して「当事者の物語を語れ」とする強迫そのものへの倦怠を示すこともある。

これらを含めて見てゆく上で、「ストーリーの増殖」(Plummer)は最終的なゴールではない。まず必要なのは、ある社会問題について「当事者が語る」ことが、その問題をめぐる言説空間や当事者とされる本人にとって持つ意味を探ることを通して、「当事者」という固有の位置性を考察することである。「当事者学」が目指したような「当事者による語りなおし」に意義を認め、さらなる可能性を見出してゆく上で、このような考察は重要であるように思う。

なお、本稿が着目する<当事者>とは、ある社会問題に関する行為者たちの相互関係において規定されるひとつの位置性positionalityを示しており、そこに何らかの「実態」や「本質」を措定するものではない。以下、このような意味での行為者の位置性を記述する際に、<当事者><非当事者>など特に<カッコ>付きの標記を行うこととする。

### III. 対象および方法

以上の主題を追求する具体的な事例として、本稿は不登校といわれる事例を取り上げる。不登校は、精神科医や心理学者、社会学者、教育学者、治療者、親、教師などの<非当事者>によって語られてきた歴史を持ち、「<当事者>の語り」が固有の意味を付与されている点で、本稿の問いを検証するのにふさわしい主題だと考えられるためである。

不登校については、大まかにはふたつの物語が存在している。ひとつは、「子どもは学校に行くべきであり、不登校者を学校に戻すために手を尽くすべき」とするものであり、もうひとつは「子どもは学校に行かなくてもよいのであり、学校の他にフリースクールなどの選択肢を認めるべき」とするものである。前者が主に不登校の「克服」「治療」を志向する専門家や治療者および「解決すべき望ましくはない状態」と捉える行政によって担われてきた支配的な物

語であったのに対し、後者は不登校を考える親の会やフリースクール・フリースペースといった「居場所」<sup>④</sup>関係者による「異議申し立て」としての物語であった。不登校は、主としてこれらの<非当事者>によって、「病理・逸脱」あるいは「選択」という物語のバリエーションで語られてきたといえる。

とはいえ、同時にそこにおいては、<当事者>である子ども・若者の語りが絶え間ない関心を集めてきた。ことに不登校に「肯定」的な「選択」の物語の語り手たちは、子どもの話に耳を傾け、その主張を汲み取り、各種メディアを通じて「<当事者>の声」を伝達することに心を砕いてきた。子どもたちの手記には、不登校に「肯定」的な「居場所」の中で自己肯定感を取り戻してゆく物語が高い頻度で登場している。例えば、不登校の子どもの「居場所」の草分けである東京シューレ<sup>⑤</sup>の子どもたちが記した子どもたちの手記には、不登校の辛さや周囲の無理解を経て、東京シューレとの出会いによって「不登校のままでもよい」と気づき、学校の外でいきいきと、活動的に生活してる経過が綴られている(東京シューレの子どもたち(編)[1990]・[1995])。「居場所」関係者は、こうした子どもたちを「生きる道はいろいろある」として、「学歴がなくても仕事でも家庭生活でも十二分にやっていける」と紹介してきた(奥地[2001])。こうした「明るい不登校」イメージや「選択」の物語の創出は、不登校を養育者や子どもの性格的欠陥によるものと捉え、治療や矯正の対象としてきた80年代までの一般的なまなざしに対抗し、不登校の価値を肯定的に転じることを通して、不登校の子どもや親に自己肯定を保障することに貢献してきた。

しかし、「選択」の物語の中で不登校をしていた人びとが「大人」になった今、彼ら・彼女らの中には不登校による社会構造的な負の側面に直面する者が出現し始めている。不登校経験

を持つ<当事者>の一人である青年は、次のようにいう。

元登校拒否児の中でマトモな社会人になっている人が、一体どれくらいいるっていうんだろう。ひきこもり、病気、暴力といった「ハッピーエンド」とは程遠い状態にある人も少なくないはずだ。……こういう人たちは、うっかり忘れられてしまったんだろうか？ それとも、「見せたくない」とハブかれてしまったんだろうか？ もしそうだとすると、疑問がわいてくる。「明るい登校拒否」の物語は、本当に登校拒否を肯定するようなものだったのか？(Bさん[2003])

ここでは、「選択」や「明るい不登校」に代表されるこれまでの不登校肯定の物語が、<当事者>本人によって批判されることが示されている。「病理・逸脱」から「どの子にも起こりうる不登校」へ、さらに「心の問題」から「進路の問題」へと文部科学省の不登校問題の捉え方が変化し<sup>⑥</sup>、それに伴って不登校をめぐる言説空間が錯綜してゆく中で、不登校の<当事者>は一枚岩ではなく、したがって「<当事者>の物語」もまた、単一ではありえないことが明らかになりつつある。

そうした状況において、不登校を「<当事者>が語る」とは、どういうことなのだろうか。不登校を「選択」の結果として明るいイメージとともに語る語りは、確かに支配的な物語に対抗するオルタナティブとなった。しかし、そのようにして語られた「<当事者>の物語」は、ここでは再び定型へと回収され、<当事者>の多様性を隠蔽するものとなっている。

本稿では、不登校の物語をめぐる以上のような動きに着目し、不登校経験者の実際の語りの中から、「<当事者>が語ること」の意義と課題を探りたい。具体的には、インタビュー調査に

よって得られた不登校経験を持つ3人の語りを中心に分析してゆく。

主要な対象となったのは、Aさん(28歳男性)、Bさん(26歳男性)、Cさん(23歳男性)の3人である。彼らは、「選択」の物語が登場した1980年代に義務教育年齢にあり、不登校となり、不登校に肯定的な価値を示すフリースクールに属した経験を持つ。3人とも<当事者>の子ども・若者として、不登校について活発に意見表明してきた人びとであり、「よりよい物語」の積極的な担い手であった。

語り手たちとのアクセスは、①彼らの出身のフリースクールおよびそれらの関連団体の主催する公開講座・イベント等に参加し直接関係を築く、②そのようにして知り合った人にさらに知人・友人を紹介してもらうなどの方法によってなされた。

調査方法は、面接によるインタビュー調査である。語り手とは、1~5回程度会い、一対一あるいはグループでのインタビューを行った。また、各種イベントや講座における出席者のやりとりを観察し、発言を収集した。

また、インタビューの過程で入手した語り手の作文、手記、本稿のドラフトに対するコメントなどのテキストも、了承を得た上で適宜参照した。

なお、調査期間は2002年5月から2003年10月までである。語り手の年齢は、2003年度におけるものに統一した。

## IV. 「<当事者>の語り」をめぐって

### IV.1. <当事者>による「よりよい物語」の創出

「<当事者>の物語」は、経験を忠実に言語化したものとして<当事者>の内側に存在するのではなく、それが要請される文脈において、ある宛て先(聞き手)との関係の中で、必要に応じて紡ぎだされる。

以下では、A~Cさんによる不登校の語りを通

して、実際に<当事者>が「よりよい物語」を語るプロセスを見てゆこう。

### IV.1.1 おまえら、学校行ってるのにその程度か!

#### (Aさんの語りから)

Aさんは、現在28歳、大手旅行会社の営業マンである。小学校4年の5月から学校に行かなくなったため、「学校教育は実質3年間しか受けて」おらず、その後も中学、高校、大学などに行くことはなかった。学校に行かなくなったきっかけや理由については、16歳当時の手記では、「ただ学校に行く吐き気をもよおすので行きたくなかった」と振り返っている。フリースクールの開設当初からの会員であったAさんは、16歳でフリースクール通信の編集長や「子どもの本」実行委員会代表などをつとめ、17歳で「フリースクール奄美大島における差別追放運動子ども調査団」に参加するなど、活発な活動を続けてきた。

Aさんの語る物語は、「選択の実現」の物語である。Aさんは、「学校に行く・行かないは選択の問題にすぎない」として、中卒の学歴のままエリートサラリーマンになり、「学歴がなくても仕事でも家庭でも十二分にやっていける」とするフリースクール的な「選択」の物語の体現者となっていた。

これは、Aさんが義務教育年齢であった80年代を通じて主流であった「病理・逸脱」の物語への対抗的物語であり、その宛先は「病理・逸脱」の物語の主な担い手であった当時の文部省や専門家であったといえる。

彼が実行委員の代表をつとめて生まれた本が、不登校の<当事者>言説を集めた初の著『学校に行かない僕から学校に行かない君へ：登校拒否・私たちの選択』(東京シュレーの子どもたち(編)[1991])である。Aさんは、その前文に以下のような文章を寄せている。

学校に行く、行かないは、おおげさに言えば人生の一つの選択に過ぎないと思うのです。ですから学校をこよなく愛する人たちには、皮肉ではなく未来永劫学校に行ってもらえれば、それはそれで誠に結構な事だと思うのです。自分にあった勉強の仕方、自分にあった生き方、それが大事なのだと思うのです。大人は憲法第二二条職業選択の自由アハハーンを振りかざして、堂々と愛想のついた会社を辞めることが出来ますが、なぜ子どもは堂々と愛想のついた学校を辞めることが許されないのでしょうか(Aさん(16歳)東京シュールの子どもたち編 [1991: 5-6])。

「皮肉ではない」と断りながらも、「学校をこよなく愛する人たちは、未来永劫学校に行ってもらえれば結構」と学校へ行く者を揶揄さえてみせるAさんの態度は、センセーショナルでマスメディアの関心を呼ぶとともに、いまだ「病気」「異常」とする見解が強かった1990年当時の不登校者にとっては、溜飲を下げるような希望として受け入れられてゆき、「個性的であるがゆえに学校制度になじまない、明るい不登校」イメージの走りとなった。

19歳でフリースクールを退会した後、Aさんは「ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ」など世界を旅行し、フランスに語学留学をする。その後、旅行会社の大卒以上の採用公募に中学卒の学歴で応募し、経験と実力が買われて入社する。社内では「社長賞」「本部長賞」などを授与されるなど営業成績はトップであり、現在では多くの部下を持つ。

Aさんは、「今では普通の会社員」と自称する一方で、不登校については「日本人だとか男だとかいうのと同じぐらい……常に離れられないもの」「非常に根底にあるもの」と語った。企業社会の競争に参入しながら不登校経験をい

わばアイデンティティとするAさんは、「不登校であっても／あるからこそ、学歴のある人間には負けない」とする独自の態度を持っている。

私：じゃあその、学歴無しで世の中に出ていってやる、みたいな意気込みみたいな。

A：そうですね、絶対に世の中を見返してやろうと。今でもやっぱりそういうふうに思ってるし。……だからぼくは完全に、人間としてよくないかもしれないけど、見下してるんですよ。「おまえら、学校行ってるのにその程度か」って。(Aさん インタビュー)

学校に行く者にみずからを対比させ、それを「見下し」さえするというこのような態度は、16歳の頃に書かれた先の引用に通じるものがある。

さらに、Aさんは、自分がフリースクールによって「不登校エリート」「成功例」として紹介されることについても、「素朴に嬉しい」としており、比較的肯定的に捉えていた。

フリースクール関係の資料は、「進路～生きる道はいろいろある」として、以下のようにAさんを紹介する。

フリーターから旅行代理店のトップセールスマンに：現在Aさんは大手旅行代理店の都心にある支店で働いています。Aさんは小さい頃から旅行や電車・飛行機などが大好きでした。小学校から学校には行かず、中学も高校も通っていません。フリースクールを出た後は、アルバイトをしてお金をためては、アジアからアフリカまで世界各地を旅してきました。また、フランスに語学留学もしました。帰国後、その経験が評価され、現在働いている旅行代理店に入社し、大卒の同僚より多く売上げているとの

ことです。現在は、結婚して幸せな家庭も築いています。学歴がなくても、仕事でも家庭生活でも十二分にやっていけるとのことです(奥地[2001])。

フリースクールにとっては、Aさんの事例は「学校に行かなくても個性を活かして社会で活躍できる」という成功の物語に適合的であるため、外部への紹介や不登校の親や子の不安を解消するために頻繁に用いられる。

このような紹介のされ方についてどう思うかと尋ねたところ、返ってきたAさんの答は以下のようなものであった。

別に何とも思わないですよ。まあその、ただただ、非常に感傷的に、自分の生まれ育った母校で、そういうふうに今でも言ってくれてるってことは嬉しいな、って。もしかしたら、学校に行ってた人たちで分かる言葉で言いかえれば、自分の行ってた中学校とか小学校の玄関に、昔自分で描いた絵がまだ飾ってある、みたいなね。みんな、そういうの見たら、「ああ、何かわけもなく嬉しいな」って思うと思うんだけど。そういう感情はありますけども、それ以上のものは何もない。(Aさんインタビュー)

もともと、この話の直後にAさんは「でも、何もないのはよくないね、本当は危険だと思わなくちゃいけない」と付け加えている。それは「確かに(成功)例(になっている)かもしれないけど、不登校したらそうなるってわけでもないし、フリースクールのおかげで僕は成長したけども、そこにさえ行っとけば将来安泰みたいな、そういうことではない」からである。

フリースクール出身の「不登校エリート」たちが集まると、「おれたちは……こんなふうにいつまでも例として挙げられていていいのか」

と「尽きない論争」になるになるのだという。Aさんが議論をたたかわせる相手は、大手新聞社に就職し、記者になった同じフリースクール出身の友人である。

A：まあ彼と僕はいつもフリースクールの自慢話に引き出されると。で、何か心理として、あまりよろしくないんじゃないかという。じゃあどうあるべきなのかって。まったく、希望の灯火がないのでもまたそれは困るし、かといって誇張し過ぎてはまた、おかしいし。

私：でも自分の感想としては、そういうふうに取り上げてくれるのは嬉しい——。

A：まあ、素朴に嬉しい。それ以上はあんまり何にも思わない。でも、彼にそんなこと言ったら、「おまえは認識があまい」って言われる。(Aさんインタビュー)

注目したいのは、「成功例」として取り上げられることが「よろしくない」としても、それがAさんにとっては自身の個人的・心理的な問題として認識されていることである。「成功例」的でない方にAさんが違和感を持つとすれば、それはいわば「希望の灯火」としての自負と「誇張し過ぎてはおかしい」という謙遜のあいだの居心地悪さであり、「不登校エリート」というみずからの位置そのものが問題化されているのではない。Aさんは、あくまで現在の状況を個人の能力と努力の成果と受け止めており、周囲からの評価については「素朴に嬉しい」か「何とも思わない」としていた。

しかし、「学歴がなくても……十二分にやっていける」とする物語は、学歴などの社会構造的な不平等を私的に克服する「不登校エリート」という例外的な個人を肯定する物語である。荻谷剛彦は、「日本の場合……新自由主義・新保守主義なるものと、個性主義と子ども中心主義

は実はある部分で共犯関係にあった」(荻谷[2003:62])と指摘するが、そうだとすれば、その二つの交点で、例外的に成功を収めた「エリート」がAさんだといえるだろう。彼の「成功」の背景には、Aさんの個人的な資質と独特の社風が大きく作用しており、一般化はしがたいのである。

「やっていける人」を肯定するこの物語は、構造上「やっていけない人」の否定というプロットを含み持つ。Aさんは、周囲の不登校経験者を見渡して「こいつこのままでやっていけるのかな、と思うようなやつが、いっぱいいる」とするなど、基本的には「経済的にも精神的にも、ひとりで自立して生きていけてないってこと」を「だめ」なことと捉えていた。

#### IV.1.2. 不登校は病気なんだ!?(Bさんの語りから)

これに対して、「選択」の物語に真っ向から疑義を呈するのがBさんである。

Bさんは、現在26歳、予備校の講師をしている。小学校4年生のとき不登校になり、その1年後にフリースクールに入会した。15歳で定時制高校に入学、2年時に大学検定を取り、退学。2年間のフリーター生活を経て、アメリカに語学留学し、コミュニティ・カレッジで学んだ後、イギリスの大学で社会学を専攻した。帰国後は現在の仕事をしている。

Bさんが語っていたのは、「選択の超越」ともいべき物語であり、その宛て先は<「居場所」関係者>および「不登校エリート」ないし「明るい登校拒否児」である。

不登校経験を持ち、フリースクールに通い、その後大学に行ったBさんの、学校と不登校に対する思いは複雑である。Bさんは、21歳のとき、フリースクール関係の雑誌でそれまでの自分を以下のように振り返っている。

六歳の自分にとって学校に行くのは「当たり前」のことだった。十歳でどうしても学校に行けなくなった時、だから「自分はいかにダメな存在か」を思い知らされたような気になって、人生の終わりだと思った。「学校外の居場所」に行って、同じように学校に行っていないのに平然としている連中に出会い、そのことをそのまま受けいれている大人たちを見て、押しつぶされそうに重い肩の荷が降りたように感じた。その後しばらくは勢い余って「学校に行っていないオレはエライんだ」とか、「学校に行ってるヤツらはバカだ」などと、それまでの裏返しのプライドをもったりもしたが、やがて「学校に行きたい人は行けばいいし、行きたくない人は行かなければいいのであって、他人がとやかく言う問題ではない」という考えに落ち着いた(Bさん(21歳)[1998])。

そのように「学校に行く・行かないは選択の問題だ」とする考えに至ったBさんは、「学校には行かないなどと思い決めるのはかえって学校にこだわっていてだめだ。ぼくには興味のあることがあって、それは今の世の中だと大学で一番やりやすいから、それで大学に行くんだ」と「表向きの理由」を付けて、「学校を選択」するつもりで大学受験のための勉強を始める。

しかし、やがてBさんはその理由を「ウソっぽい」と感じるようになる。「大学に行くことを決めるってことは、学歴とかそういう特権がほしいっていう、どんなにいいつくろってもそこがあって、それで嫌気がさした」という彼は、受験をやめてしまう。「大学には絶対に行かない」——そう思い決めた時代もあったが、しだいにその気持ちはなくなり、留学を決意したのだという。

こうした体験を通じて、Bさんはフリースクール的な「選択」「明るい不登校」の物語に疑



いをさしはさむようになってゆく。そこでは、かつて自分を「不安」から救ったフリースクールの物語が、批判の対象となった。「選択」の物語は、「学校に行くこと」と「行かないこと」を同列の選択肢として並置するが、Bさんはそこにおける両者の関係を問おうとする。

学校に行くか行かないかは個人の選択の問題だ——こんな言い方はたしかに耳障りがいい。学校に行ってる人・行ってない人、どっちも肯定的にとらえることができるからだ。でもそれって、なんかウソっぽくない？……高学歴の人が高収入で快適な仕事を維持できるのも、低学歴の人がそこから排除されているからにほかならない。これは逆に言うと、低学歴の人への差別も高学歴の人の特権と無関係じゃないってことだ。だったら、「学校に行きたい人は行けばいいし、行きたくない人は行かなければいい」なんて甘ッチョロイ言い方はもう止めたほうがいい。……学校に行く人も行かない人も同じ社会に生きている。学校に行かない人の解放は、行く人のあり方を変えることなしにはあり得ない(Bさん(22歳)[1999])。

ここでは、「選択」の論理が、不登校による学歴や職業からの疎外という事実を、「選択」という不登校者の個人的な問題にすりかえることによって、学歴のないものに職を閉ざす社会構造を免罪する効果を持つことが問題化されている。Aさんが個人的に克服することによって隠蔽した「学歴」という特権をめぐる非対称構造を、Bさんは可視化しようとする。

さらに、Bさんは「明るい不登校」が強調されることで影に追いやられる暴力、ひきこもり、心身不調などに目を向けてゆく。「閉じ込もっていた時期があったからこそ今こうして元気に

やっつけられる」として「『閉じ込もり』期」を「明るい不登校」の手段に位置づける「これまでの登校拒否肯定言説」を批判するBさんは、そこでは「『元気にならなかった』人々のことは肯定的に取り上げられることがほとんどなかった」(Bさん(21歳)[1998])ことを問題化し、さらに次のように述べている。

そうである以上、僕は次のように言いたいと思います。登校拒否は病気だ。登校拒否は暴力を生む。登校拒否は引きこもりにつながる。そして、そのようなものとしての登校拒否を肯定するのだと(Bさん(25歳)[2002])。

Bさんの事例は、「選択」の物語が、それを一度完全に内面化した当の本人によって批判されうるといふ、フリースクールが直面する今日的な状況をあらわしているだろう。1989年に出版された東京シューレの創立者である奥地圭子による「選択」の物語の代表的な著『登校拒否は病気じゃない』(奥地[1989])の後に続いて、1991年に『学校に行かない僕から学校に行かない君へ：登校拒否・私たちの選択』(東京シューレの子どもたち編[1991])が世に出る。「不登校は病気ではない、選択の結果だ」——このような言説から15年、現在多くの元不登校者が「選んだ」というにはあまりに居心地の悪い場所に止まりつづけている。「登校拒否は病気だ……そのようなものとしての登校拒否を肯定する」というBさんの語りは、このような状況下で必然的に要請される「よりよい」物語の創出の実践であった。

#### IV.1.3. ぼくは<当事者>じゃない(Cさんの語りから)

「選択」か、「病」か——AさんとBさんの自己肯定戦略がそうであったように、不登校の物

語は<当事者>においても、この二つの大きなプロットのあいだで語られてきている。しかし、「明るい不登校」も「ひきこもり」も含めて不登校にまつわる諸現象の価値を肯定的に転じようとするならば、このいずれかに依拠することは難しい。

そこで、最後に挙げておきたいのは、Cさんの「選択の転用」の物語である。

Cさんは、小学校4年のときにいじめなどをきっかけに学校に行かなくなり、2年半のあいだ家の中で過ごしたのち、フリースクールに通うようになった。フリースクールでは、通信の編集長や子どもの本実行委員会の代表をつとめたのをはじめ、ラジオ番組への出演、世界フリースクール大会への参加、様々な関連イベントの主催や参加など、フリースクールの中で主導的役割を果たしてきた。中学、高校、大学には行くことなく、現在はみずから立ち上げに関わったフリースクールの関連機関である「フリースクール大学」で「学生」をしており、不登校に関わり続けている。

Cさんは、Aさんと同様フリースクール的な「選択」の物語を語る。しかし、Aさんが「よりよい物語」として「選択」を語ったのに対し、Cさんはそれが「よりよい」かどうかは棚上げし、現在ある「選択」の物語を戦略的に利用していた。

Cさんの不登校に対する考えは、基本的にフリースクールの理念に沿っており、「選択」の物語をなぞっている。Cさんが重視するのは、「子どもが学校に行かない状態を親が認めること」である。不登校になった子どもは、多くの場合、彼自身がそうであったように、まずは家庭にひきこもる。子どもが居心地よくあるためには、親が登校を強制させる姿勢を改め、不登校を「子どもの選んだひとつの生き方」として認めることによって、家庭の雰囲気を受容的なものに変えていくことが不可欠だとされる。

その一方で、CさんはBさんの「選択」批判を經由しており、「選択する、しないの問題じゃないと思ってます。結論としては、そういうふうには（「選択」と）いうんだけど、言葉でしかない言葉、テレビ的発言ですよ」とするなど、これが「万能」の物語ではありえないことを感じていた。

Aさんが「不登校＝病理・逸脱」とする80年代当時の文部省や専門家、民間の矯正者らに向けて語り、Bさんが「不登校＝選択の結果」とする「明るい不登校者」ないしフリースクール関係者に対して語ったとすれば、「選択」を反復しながらその内実を意図的・非意図的に変容させてゆくCさんの語りの宛て先は、<当事者>という位置そのものだといえようか。

Cさんは、不登校の状態に苦しみを感じていた当初、「元気になった元不登校の人」に対して怒りを感じた経験を以下のように語っている。

ほくがちょうど不登校の真ただ中で、寝ても覚めても苦しかったときに、元気になった元不登校の人に「ほくは今元気にやってるから君もきっと大丈夫だよ」っていわれて、そういう文章を渡されたことがあって。そのとき、ほくはどうだったかっていうと、ものすごく腹が立ったんですよ。とにかくすごい怒りがあって。苦しいのは今なんだ、苦しんでるのはほくなんだっていう。あなたはよかったかもしれないけど。(Cさん インタビュー)

<当事者>にとっては、「選択」の物語による「苦しみ」の消去や、「昔は苦しかったが今は元気にやっている」とする「苦しみ」の手段化は、「苦しいのは今なんだ、苦しんでるのはほくなんだ」という「今・ここ」にある生身のリアリティを不当に侵すものとなる。

「選択」の物語の持つそのような効果を認識しながら、なお「選択」をいつづける背景には、次のような意識がある。

でもそれが、今は、ぼく自身がその立場にいるんですよ。「ぼくは不登校を選んだ」ってやっぱりぼくもいうわけだけど、でも、それをいう相手は親であって子どもではないですね。「一番つらいのは子ども本人なんだ」ってことを、親にいう。その違いかな。やっぱり親の考えが変わるのってすごく大きいから。(Cさんインタビュー)

ここで注目したいのは、Cさんが語りかける相手が、不登校の子ども本人ではなく、あくまでもその<親>だという点である。Cさんは、「ぼくは不登校を選んだ」と語ることで、不登校の<当事者>を代表=代弁してしまうことに自覚的である。不登校の子どもの前で<当事者>を名乗ることは、今ではもう「不登校の真っただ中」にあるわけではない「元気になった元不登校者」であるCさんが、彼ら・彼女らの「苦しみ」を代弁することによってその固有の主体性を剥奪することにつながってしまう。

<親>の前では<当事者>として語りながら、子どもに対しては「同じように<当事者>」としては語りえない。そのようなみずからの立場について、Cさんは以下のように述べている。

ぼくも<当事者>じゃないんですよ。なぜなら、言葉を持ってしまったから。Aとかの言葉を知って、自分のことを語れるようになってしまったから。(フリースクールの説明会で)一番いい話するのは、学校に行かなくなった子どもたちなんですよ。喋ってって言われても、みんな言葉になんないの。がたがたしちゃって。でもそれが一番いいの。それが一番伝わるの。言葉じ

やない部分を持って人が当事者だと思う。フリースクールの説明会とかでは、初めての子の方がいい話をする。(Cさんインタビュー)

「ぼくは<当事者>じゃない」とするCさんの言葉からは、<当事者>を代表することへの自制と、言葉を持たない存在に対する想像力をうかがうことができるだろう。

自分が「<当事者>ではない」ことを意識しながらも<当事者>として、「選択じゃない」ことを知りつつ「選択」の物語を、それでも語りつけてゆくということ。そのようなCさんの実践は、<当事者>という位置性と「選択」という物語を、反復しながら掘り崩していく効果を持つだろう。このように、担い手、文脈、効果の多様性をあわせて考えれば、「選択」の物語は不登校をめぐる状況を動かしていく実践となりうる場合が数多くあるのであり、Cさんにおいて、「選択」の物語の持つ限界は、それを戦略的に使いつづけることによって、まさに内側から乗り越えられつつあるといえるのではないだろうか。

#### IV.2. 物語の強迫

支配的な物語がある人にとって抑圧的であるとき、対抗的な「よりよい物語」が紡ぎ出される。前節でみたのはそのような動きであった。

そこには常に「不登校の自己を物語れ」という要請がはたらいていた。「なぜ学校に行かないのか」「なぜフリースクールに行くのか」「なぜ再び学校に戻るのか」——不登校者として投げかけられつづけたこのような問いは、80年代に学齢期を迎えた「フリースクール第一世代」ともいうべき世代に属し、活発な活動でフリースクールを支えてきたAさん、Bさんにとっては特に、避けては通れない問いであった。彼らにとって不登校は、いわばひとつのアイデンテ

イティであり、不登校についての考えを語ることが「自分とは何か」を語ることとひとしくなっていた。

しかし一方で、「自分の不登校の論理付けとかをしてがんばってるのは、一部の元気で活発な人でしょ……ほとんどの人はそんなこと考えてないんじゃないかな」(25歳男性)といわれるように、このような不登校経験の意味付けの仕方は、フリースクールの外側ではもちろんのこと、その内であっても、必ずしも多くの不登校者に共有されているわけではない。「不登校の自己を語れ」という物語化の要請は、不登校をめぐる言語化しがたいさまざまなリアリティを寸断し、単一のプロットに流し込むことを求めている点で、<当事者>にとって抑圧となりうる。

以下は、2003年3月に行われた東京都内のあるフリースクール主催の「先輩が語る不登校」というイベントにおいて観察された、会場からの発言である。発言者は、小学校4年から不登校気味になり、通信制高校を出て現在は専門学校生をしている20歳の女性である。

どうして学校に行かなかったのか、わたしもよくわからないんです。今専門に行ってるんですけど、この質問はほんとにいつつもされるんです。でも、そのたびにどうやって答えていいか分からなくなるんです。これって分かってなくちゃだめなんですか。分かってなくてもいいと思いますか。でもそれでいいと思ってもらって聞かれるし。みなさんはどう思いますか。(20歳女性 参与観察)

「なぜ学校に行かない(行かなかった)のか」という質問は、不登校を通じた自己語りを迫る最初の問いかけである。そのイベントは、不登校経験を持つ主として10代～20代の若者が、パ

ネリストとしてフリースクール関係者や不登校児の親の前で自分の体験を語る、という主旨で行われた。司会を務めるフリースクール主催者(40代男性)によって用意された質問の中に「不登校の理由を教えてください」とする項目があり、パネリストの<当事者>の中から「答えにくい」「陳腐である」などの反発が寄せられたため、会場からパネリストに対してそのような質問がなされたのである。

「なぜ学校に行かない(行かなかった)のか」を問いかけるのは、不登校者を登校させようとする学校現場や医療関係者だけではない。不登校の理由の言語化は、「居場所」においてさえも、というよりはむしろ、そこにおいてこそ、強く要請されるといえる。

わたしはあるフリースクールに行ってたんですけど、そのときは学校を否定することによって不登校の理由がわかったって思ったんです。でも、フリースクールにも行きたくなかったら、せっかく見つけた理由がまた分からなくなっちゃったんですね。学校を否定することで自分たちを、不登校を正当化するっていうか、そういうことに違和感があって。……言葉が立派過ぎちゃう。社会とか、今の学校システムとかの答が出てきちゃう。そういう質問だから、(不登校の理由を問う質問は)嫌なんです。(20歳女性 参与観察)

不登校の理由を問われたとたん、不登校者の語りは特定の回路に流し込まれることになる。「なぜ学校に行かないのか」に答えるためには、成育歴や親のパーソナリティといった「心理」の言葉で語るか、「学歴社会」「偏差値主義」など「社会」の言葉で語るか、「教師の暴力」「クラスメイトのいじめ」「校則」などの「学級」の言葉で語るか、ほぼそのどれかしかありえな

いのである。

フリースクールが「学校を否定することで不登校を正当化」しているかどうかはともかく、それが「立派すぎる言葉」によるストーリーの固定化を生み出しているとの現実感は重要である。この女性が嫌悪を感じているように、「なぜ学校に行かないのか」と「居場所」関係者が問うとき、そこでは「不自由な教育システム」という回答と、「だから自由なフリースクールを選ぶ」という態度が、暗黙のうちに要請されているのである。

不登校の理由については、この日のパネリストたちの多くが「わからない」と回答していた。「人類がなぜ誕生したのか知ると同じ位むずかしいのでわかりません」(19歳女性)、「分からない。この質問にはいつも一番困る。ただ、あの頃の私にはそうするしかなかったのだと思う」(25歳女性)といった回答には、質問そのものの意義に対する不信感が示されているように思われる。

不登校の子を持つ親の会の代表を務める山田潤は、「語れ」と詰め寄る大人たちの要請を「黙り通す」ことによって拒む子どもの態度について、以下のような評価を与える。

思えば、大半の親たちが、また教師たちが、学校にいかない子どもに向かって「なぜか？」を問いつめ、「何を考えているんだ？」と迫り、むりやりにでも子どもの口を開かせようとした。それは、また、「不登校の子をもつ母親」の場合も同じであった。多くの子どもは、賢明にも(ほんとうに、頭が下がる思いで、賢明にも、と言わねばならない場合が多々あった)、ガンとして黙り通すことを選んだ。かたくなに口を開かずことによって、「社会性の未熟」を言われ、「だから学校にも行けないのだ」と勝手な解釈を押しつけられても、なお、

黙り通した(山田[2002:238])。

「不登校の理由」を語ることを拒否することは、不登校を「理解してもらおう」ことへの拒絶でもある。「心理」や「社会」の言葉で語ることで、自己の不登校を理解可能な共通の回路に落としてゆくならば、子どもにとって自己の不登校というユニークな体験は、いつか誰かが用意したストーリーの定型の中へと、回収されてしまうだろう。そのようにならないために、「わからない」という言葉や、端的な沈黙によって、<当事者>は「不登校を通して自己を語れ」とする強迫を宙づりにする。

<当事者>が「理由」を語ることを拒むことは、<非当事者>による「理解」を拒むことでもある。

映画『home』はひきこもりの「兄」の姿を「弟」が撮影したドキュメンタリ作品である。ひきこもり、暴力、ひきこもり、家族との葛藤、ひきこもり……そして、最後に主人公の「兄」はひきこもることをやめ、車に乗り込んで家を出る。「ひきこもってもいいじゃないか。ちょっと遠回りするだけだよ」という副題そのままに、「兄」の「回復」によって物語りは終わる。作者である「弟」は語る。

いつか、誤解を恐れずに言えば、「ひきこもり」の時期を“遅い思春期”として、「ひきこもり」から脱し社会に出ようと決意した時期を“遅い成人式”と考えられる心の余裕が生まれる日が来ることを願ってやまない(小林貴裕[2002])。

「弟」は、ひきこもりの「兄」を「肯定」している。

一方で「兄」は、「あの結末に<ハッピーエンド>を読みとる観客に腹を立てている」という。「兄」によれば、『ひきこもり』をしてきた人

間は、<その後>が問題だ。外に出られるようになってからの方が、もっと辛い現実があるんだ。「兄」の腹立ちは、「理解者」である「弟」をはじめとする周囲の人々にも向けられる。

「ひきこもり」当事者とその周囲の人々の間には、ある絶望的な意識の差がある。そして、その意識の差異の提示はあらゆる場面で行われうるべきだ。……

「ひきこもってもいいじゃないか。ちょっと遠回りするだけだよ」

ちっとも、よくない。

この一文を、そのままの意味で弟がとらえているのだとしたら、私は、これからも弟と対決していかなければならないだろう(小林博和[2002])。

ここでは、「ひきこもり」を<ハッピーエンド>のストーリーに回収し「理解」しようとする人々に対して、それがどんなに共感的な理解者であっても、「対決」を余儀なくされるような、圧倒的な共約不可能性が示されている。

このような事態は、不登校の文脈であっても変わらない。Bさんは以下のように問う。

問われるべきなのは、なぜ不登校の肯定が反発されるか、ということではないのかもしれない。むしろ不思議なのは、なぜ一部のマスコミや文化人が不登校の肯定を受け入れることができた(かのように見える)のか、ということの方です。不登校の肯定は学校に行く人の側のアイデンティティの崩壊に結びつきかねないものなのに、なぜ学校エリートである彼らが簡単にフリースクールの主張に同調できるのでしょうか(Bさん(25歳)[2002])。

Bさんが表明するのは「学校へ行った者」が

「不登校者」の立場を侵食して示す「理解」への違和感、すなわち共感の拒絶と代弁の拒否である。

<非当事者>が「<当事者>の気持ちになって」示す「理解」は、みずからの要請にしたがって語られた「<当事者>の物語」に差し向けられたものであり、<当事者>を「共感」や「代弁」が可能な範囲に塗りこめてしまう。<当事者>の示す不快や怒りは、そのような「理解」という名のもとにおこなわれる他者性の剥奪に対して向けられている。<当事者>は「わかってももらえない」ことにじれていられるばかりではなく、「わかられすぎてしまう」ことに倦怠もしているのであり、そこで問題となっているのは、「語りえないこと」よりもむしろ「語らされること」、執拗に耳を傾けられ、善意と期待を込めて言葉を待たれるということである。

そうであるならば、「<当事者>の物語」を「理解」するか否かではなく、不登校の「理由」を問い、物語をつむがせる強迫そのものを問題化する必要がある。求められているのは「よりよい<当事者>の物語」の創出ではなく、<当事者>という位置そのものについて考察することである。

## V. 結論

以上では、不登校をめぐる<当事者>の語りを通して、「よりよい物語」が創出されるプロセスと、「語らせないで」という物語の強迫への抵抗を見てきた。

結論では、「<当事者>であること」の意味を考察した上で(i)、「<当事者>の物語」の課題を、「アイデンティティの政治」をめぐるポストコロニアル論の知見を参照しながら明らかにしたい(ii)。

### V.1. 「<当事者>である」とはどういうことか

<当事者>とはいったい「誰」であり、「<当

事者>である」とはどのようなことなのだろうか。

<当事者>を「語りを通じて生成される自己」と捉える物語論的立場では、その中身は流動的で実態をもたない空疎なものとしていた。一方で、「当事者学」的立場のもとでは、あくまでも「当事者である私」がまずあってそれが「語る」のであり、<当事者>は具体的で実態的な存在であった。

しかし、不登校者たちの語りを通して見えてきたのは、<当事者>という立場がそのどちらにも還元されえないということだったように思う。「僕は<当事者>じゃない」「<当事者>として語らせないで」といった語りは、<当事者>という立場が現実には常に同定しづらい逃げ水のような存在であることを示すと同時に、語りへと追い込まれるという点で<非当事者>とは共約不可能な固有性を<当事者>が有していることを、示唆していると思われるからである。以下では「自己を語ること」との関係から、<当事者>という位置の特徴について考えてみよう。

大澤真幸は、自己と自己の語りをめぐる一般的な原理を考察し、自己物語について「自己が自己について語るということは、その語りの言語行為を、自己に対して外在する他者に委託する形式において確保するということである」と述べている(大澤[1996:300])。自己が自己を語るためには、自己の「同一性(アイデンティティ)」が他者によって与えられていなくてはならない。そうした意味で、「私は～である」という語りは「原理的には不可能」であり、「その不可能性こそが、語る事が可能であるための条件なのである」(大澤[1996:300])。

大澤のいう「語ることの不可能性」とは、自己を語ろうとするあらゆる行為者の上に立ちあらわれるものであり、語り手の<当事者>/<非当事者>を問わず、一般的な原理として示しうることである。だとすれば、どこからが、<当

事者>という位置性の固有性に関係してくるといえるだろうか。

この点を大澤は、他者によって確保された自己の同一性が、肯定的なものであるか、否定的なものであるかということが、ある社会構造の内部において、「語りうる」優越者であるか、「語りえない」服属者であるかということに関係するのだと説明する(大澤[1996:300-301])。ここで指摘されている「語りえなさ」は社会的で文脈依存的なものであり、先に述べられたような、言語という他者に属するものに依存するすべての自己物語が持つ原理的な語りの不可能性とは、水準を異にしている。そこでは社会的に規定された「同一性」が肯定的であれば「語りうる」一方で、否定的であれば「語りえない」ことになり、ある社会構造における「語る自己」の非対称性は、自己についての他者の物語の否定的/肯定的という価値に基づいているとされる。そうだとすれば、物語の価値を肯定的に転ずることが、「語りえなさ」を救済する手立てとなろう。肯定的な「同一性」を打ち立てるための「よりよい物語」を語る、という物語論的な解が有効だということになる。

しかし、これは本論で見た不登校の<当事者>たちにとっては解にはならないように思われる。「不登校の<当事者>として語る」ことの不可能性は、「病理・逸脱」という否定的な価値を帯びた他者の物語があらかじめ措定されていることの困難にまつわるだけではなく、不登校の価値を肯定的に読み替えた「選択」の物語のうちにあっても、生じうるものだった。たとえば「なぜ学校に行かないのか」という問いは、不登校に否定的な人びとだけではなく、不登校を「理解」し、認め、肯定的な価値を見出そうとする<「居場所」関係者>や<親>などの人びとによっても、発せられ続けてきた問いであった。「なぜ学校に行かないのか」という問いに対する<当事者>の忌避の感情は、「よりよい物語」

を語ることによって解決されない。そこにおける「語ることの不可能性」は、あらかじめ与えられた他者の物語が「肯定的」か「否定的」かという価値の問題ではなく、「なぜ行かないのか」と問われ、その問いに対して責任を負う唯一の主体として応答を迫られるという現実そのものに関係している。「語りえない」ことではなく「語らされる」ことの中に、<当事者>という立場の固有性が存在しているように思われる。

「語りえない」と同時に「語らされる」ことを問題化する論者の一人に、在日コリアンのアイデンティティを考察した鄭暎恵がいる。鄭は「マイノリティ」／「マジョリティ」という用語を用い、両者の関係に刻印された構造的な非対称性を可視化させる。鄭[1996]によれば、「マジョリティ」は「マイノリティ」の語りをみずからを映す「鏡」としてのみ聞くことで、「マイノリティ」が語れば語るほど、そのステレオタイプを再生産させる。

「マジョリティ」は「(教えてもらわないと)わからない」を繰り返す。この「マジョリティ」の<依存>は、「マイノリティ」というアイデンティティの消費／搾取である(鄭[1996:26])。

鄭が鋭い批判の矛先を向けるのは、「もっと告発してほしい」と要求する「良識派」の「マジョリティ」と、反差別運動を抑圧者への「ラブコール」として「マジョリティ」にアイデンティティの「承認」を求めようとする「マイノリティ」の態度である。その上で鄭は、「マイノリティ」に対し、『「マジョリティ」に向かって、『「マイノリティ」』として語らないこと』『「マイノリティ」』に向かってこそ、おおいに語る」(鄭[1996:26])ことを提案する。

「語りえない」と同時に「語らされる」とい

う<当事者>の直面する事態を考える上で、「マジョリティ」に向かっては語りを拒否しながら、「マイノリティ」に対して「おおいに語る」という鄭の態度は重要だろう。しかし一方で、「マイノリティ」／「マジョリティ」という用語遣いは、鄭の主張の重要な部分を捉えそこねているように思う。もちろん、鄭が意図するのは、「マイノリティ」が一方向的に「不可能な語り」へと追い込まれ、「マジョリティ」に有利な既存の権力構造を反復させられるという両者の関係の非対称性を告発することであり、「語りうる優越者」と「語りえない服属者」の落差が厳然と存在するという意味では、「マイノリティ」／「マジョリティ」という用語はまったくくだしい。けれども、そこでは「マイノリティ」という存在が、「マジョリティ」によって一方向的に放逐され、他者化された者としてやや平面的に捉えられてしまっているように思える。それに対して「おおいに語る」ことが提案されるとき、「マイノリティ」というアイデンティティは、単に「マジョリティ」の権力構造を反復する材料ではなく、新たに引き受けられ、選びなおされた<当事者>性として、意味合いをずらされているのではないか。

鄭は、<当事者>の存在を「不可能な語り」を通して生成される「マイノリティ」という空疎な自己として捉えるが、一方で『「マイノリティ」』に向かってこそ、おおいに語る」という態度には、語りの場に「<当事者>である私」がリアルな実態として立ち現れてくることを示唆している。ここに抱えられた矛盾は、鄭の矛盾ではなく<当事者>という位置にまつわるものであり、物語論や「当事者学」における自己をめぐる議論に還元されない<当事者>という存在に、ぎりぎりまで迫っていると考えられる。

「語りえない」と同時に「語らされる」<当事者>は、<非当事者>とは共約不可能な固有の位



置性を有しているが、「<当事者>であればこうである」という「実態」や「本質」を持たない。こうした事態は、<当事者>の言説実践の中に、揺れや矛盾として読み取ることができる。例えば本稿の語り手たちは、<当事者>の代表者の存在として語るが、その語りの中においても、「ぼくは<当事者>じゃない」(Cさん)、「もうわからなくなってしまった」(Aさん)など、「もはや自分は<当事者>ではない」という感覚を表明している。彼らが示しているのは、今ではもう「大人」になり、語るができるようになってしまった彼らが実際に不登校であった過去の「子ども」の頃の経験を意味づけたり、「元気になった元不登校者」として<当事者>を代表するにあたって感受する戸惑いや忌避の感情である。彼らは積極的に「<当事者>の物語」を語りながら、<当事者>として状況を定義することそのものが「語りえない」存在の一方的な表象につながってしまうと感じている。

語り始めたとたんに確定できなくなる<当事者>という位置は、真正な<当事者>を同定しようとすることの不毛を示している。しかし、逆説的なことであるが、<当事者>の一枚岩性を裏切り、その実態の空虚さを示すためにこそ、「<当事者>として語る」ことが、絶対的に重要なのではないだろうか。彼ら・彼女らの主張は、人びとがこぞってそれについての膨大な語りを生産することによって創出された<当事者>という虚構の同一性をうらぎり、「理解」を差し向ける対象としての「<当事者>なるもの」を解体してゆく言説実践としてあると思われるからである。

## V.2. 「<当事者>の語り」の可能性

<当事者>が語りを奪われると同時に語りへと追い込まれる存在であるとすれば、「<当事者>の語り」には、どのような可能性がありうるのだろうか。以下では、<当事者>が「語ること」

に対して取りうる方向性を挙げてみたい。

第一の方向性は、<当事者>として「よりよい物語」を次々に語ることである。「当事者学」と物語論は、現在の支配的物語を批判し、対抗的物語を生成することに価値を置く点で、ともにこの方向を志向している。物語論的アプローチにおいては、先に挙げたPlummerが、「解決はないのかもしれない。残されているのはストーリーの増殖であり、まだ語られていないストーリーを認め、新しい余地をつくることである」(Plummer [1995=1998:352])としていた。また、「当事者学」では、<当事者>として語ることが、それまで語りを封じられてきた存在にとって自ら状況を定義し主体性を回復させるいとなみであるとされ、その意義が大きく評価されていた。

しかし、既に見たように、本稿が対象とした人びとは、「よりよい<当事者>の物語」を語る一方で、物語を語らせる強迫そのものに倦怠を示してもいた。このような「<当事者>として語る」ことによる主体化への拒否に目を向けるならば、「よりよい物語」を語り続けることそれ自体が抑圧を生み出していることになり、これが望ましい方向性とはいえなくなる。

第二には、「<当事者>として語る」ことそのものを拒否するという方向がある。<当事者>が<非当事者>によって規定された位置であるかぎり、その主体的な名乗りは自動的に非対称な社会関係そのものを再生産させるとして、「物語からの自由」を志向する立場である。

「よりよい物語か、物語からの自由か」という問いの設定は、ポストコロニアル論においてマイノリティの「アイデンティティの政治」をめぐってなされる「よりよいアイデンティティか、アイデンティティからの自由か」という二者択一的な問いかけに通じている。

先に挙げた鄭は、在日のアイデンティティを考察し「私たちは『民族』を理由に不当な扱い

を受けているが、目指すのは『民族』解放ではなく、あくまでも『個』の解放だ」(鄭[1994:13])として、マイノリティの対抗的アイデンティティを政治的戦略あるいは尊厳の回復の手段として評価する立場を批判している。鄭が指摘するのは、奪われたアイデンティティの回復を求める「アイデンティティの政治」的立場が、そうすることによってかえって「アイデンティティ」そのものへの強迫をみずから再生産してしまう構造である。

これに対しては、在日運動の立場から金泰泳[1999]が「<個の尊重>はたしかに必要なだが、民族として受けている現実の抑圧に対しては、便宜的にせよ民族として向き合わねば、実践的解決にはつながらない」(金[1999:130])として批判を行っている。金は、マイノリティの対抗的アイデンティティをも批判する「非本質主義」の立場が「民族的アイデンティティの確立という手段によって、社会の抑圧状況に対抗していこうとする者たちを、逆に抑圧してしまう」点に危惧を表明する。

しかし、「よりよい物語か、物語からの自由か」といったような問いの設定には慎重でなければならない。というのも、<当事者>のリアリティや具体的な実践の中で、その二つを明確に分けることが難しい場合が多々あるからである。

そこで、第三番目の方向性として、<当事者>の物語を語りながら、<当事者>という同一性の虚構をあばいてゆくことを挙げたい。

先に挙げたポストコロニアル論における「よりよいアイデンティティ」対「アイデンティティからの自由」ともいうべき対立に関連して、「存在証明」という語を用いて被抑圧者のアイデンティティを分析した石川准は、「社会の支配的な価値を作り替えることによって、これまで否定的に評価されてきた自分の社会的アイデンティティを肯定的なものへと反転させようと

する」ことを「価値の取り戻し」、「存在証明への圧力そのものを無視・軽視すること」を「存在証明からの自由」と呼び、両者を別個に概念化したうえで、次のように述べている。

価値の取り戻しと存在証明からの自由とは、概念上は異なるものの、現実には、一つ一つの集合行為において、一人一人の志向において、未分化のまま渾然とした形で醸成されることが少なくない。たとえば、障害者解放運動のなかから誕生した「障害は個性だ」あるいは「ありのままの自分を肯定しよう」という思想は、障害とか障害者という既成の恣意的なカテゴリー作用をいったん引き受けておいて、負の価値を負わされつつ作られたそのような差異の一つ一つに価値を与え返そうとする価値の取り戻しの実践であるとも言えるし、一人一人の生命体に本来的に等しく内属する価値を無条件に承認し合おうとする、存在証明からの自由を目指す活動だとも言える(石川[1999:52])。

「よりよいアイデンティティか、アイデンティティからの自由か」という枠組みに照らせば、「価値の取り戻し」は前者に、「存在証明からの自由」は後者に相当すると考えられる。しかしここでは、このような分類自体の無効性が指摘されている。「障害は個性だ」といわれたとき、障害者であることの意味は、「健常なる者」から漏れ落ちた「異常なもの」「病んだもの」というかつてのものとは別のものへと変容している。したがって「障害者であること」の価値を貶める既存の価値体系に対して「障害者」としてのアイデンティティに立脚しながら「価値の取り戻し」を行ってゆく実践を、「本質主義的」として断じることの意味は、ここでは薄い<sup>(4)</sup>。

同様に「<当事者>の語り」においても、「よ

りよい物語」と「物語からの自由」は二者択一ではなく、<当事者>の言説実践の中に混在している。

例えば、先に挙げたCさんのように、「選択」の物語の限界や抑圧を知りながら、文脈に応じて自覚的にそれを転用している場合がある。「ぼくがちょうど不登校の真ただ中で、寝ても覚めても苦しかったときに、元気になった元不登校の人に『ぼくは今元気にやってるから君もきっと大丈夫だよ』っていわれて、そういう文章を渡されたことがあって。そのとき、ぼくはどうだったかっていうと、ものすごく腹が立ったんですよ。……でもそれが、今は、ぼく自身がその立場にいるんですよね」(Cさん インタビュー)と語ったCさんの念頭にあったのは、フリースクールの説明会で、不登校の子どもを抱えながら不登校を望ましくないものと捉え、わが子を否定的にまなざす<親>に向けて話すとき、という実際的な状況であった。不登校を始めた子どもにとって、<親>はしばしば「学校の手先」であり「戦う」べき相手となる。実生活上の子どもの苦しみは、<親>の理解の有無によって大きく左右される現実がある。Cさんが不登校経験を持つ<当事者>として自身の不登校を「選択の結果」と提示することは、不登校の肯定へと<親>の翻身を促す効果を持つのである。「選択」の物語はベストではなくとも、「いまある一番大きな武器として使う」とCさんは語っている。

ここにおけるCさんの実践は、「病理・逸脱」に対する「よりよい物語」として「選択」を語っているともいえるが、同時に、「語ること」を意図的な戦略として行うことによって、物語の強迫そのものをずらし、それを失効させている点で、「物語からの自由」的な態度とも取れる。

「<当事者>に語らせて」と「<当事者>として語らせないで」という矛盾した要求をともに

不可避に求めざるをえない位置に<当事者>がいるのだとすれば、重要なのは、「よりよい物語」を次々と語ることや、それをマジョリティの作ったカテゴリーの単純ななぞり直しであり「罨」であるとして物語ることのいっさいを棄却することではなく、その「<当事者>の物語」が、語り手の意図やあて先、文脈によって、どのようなずれを含みこみ、いかなる変容を遂げてゆくかを、個別に見てゆくことになるだろう。「<当事者>の物語」は、完了することのない、常に変容の可能性に開かれたものであり、その意味で、それは語る<当事者>だけの問題ではなく、語りを聞き、解釈する側の問題でもあるといえるだろう。

## VI. 意義と限界

最後に、本稿の意義と限界をまとめておく。

本稿の意義は、不登校という具体的な社会問題の現場から、語りにおける<当事者>性の問題を考察し、語りを奪われると同時に語りへと追い込まれる<当事者>という位置の固有性を経験的に明らかにしたことだと考える。

一方で、本稿は次のような限界を抱えている。第一に、対象が不登校という事例に限定され、他の事例との比較検討がなされていないことである。経験と語りという大きなテーマを考察するには、事例があまりにも個別的・限定的であり、今後の課題としたい。

第二に、語り手があくまでも状況定義権を持つ「恵まれた」<当事者>に限られた点である。本稿の語り手たちはいわば「<当事者>として語れ」という抑圧を受けることができる存在であり、「語らせないで」という主張は、語ることができず、聞く耳すら持たれない存在にとってはひどく「甘えた話」であろうことは確かである。いまだ不登校の只中にある子どもや、学齢期を過ぎても自宅に引きこもりつづける人びとなど、自分の経験を語り得ない状態にある存

在は、インタビュー調査の現場にたち現れてくることはない。「語らせないで」という発言さえも語られるほかなかったことを思えば、その

後ろには語りに満たないさまざまな経験が広がっていることに対して、想像力を失わないでおきたいと思う。

## 註

1. 主として不登校児を対象とした民間施設で、学習指導や学校復帰を目的とせず、子どもが自由に過ごせる学び・育ちの場を、以下「居場所」と呼ぶ。「居場所」の代表的なものがフリースクール・フリースペースである。この2者の線引きは難しいが、運営上依拠する教育思想や教育理念があり、比較的体系的なプログラムが組み込まれているものにフリースクールと呼ばれるものが多く、どちらかといえば流動的で活動の規定性が少ないものがフリースペースと呼ばれる傾向にある。近年は予備校やサポート校といった塾産業の一部が「フリースクール」を自称する場合もあるが、本稿では上述の定義によりこれは含めないものとする([NPO法人東京シュール: 2000])。
2. 東京シュールは1985年6月奥地圭子によって東京都北区東十条のアパートで開設された。その後90年4月に現在の王子のビルに移転し、94年4月に大田シュール、95年6月に新宿シュールをそれぞれ開設するなど、現在は3スペースのフリースクール部門を持つ。また、ホームエデュケーション部門として93年11月に「ホームシュール」をスタートさせ、97年9月にはインターネットを活用した「サイバーシュール」も開設している。さらに、99年4月より「学校制度にとらわれない学びの場」として「シュール大学」を開設した。東京シュールは99年東京都よりNPO法人認証を受け、2000年1月よりNPO法人としてスタートし現在に至っている。
3. 文部省／文部科学省は、1980年代まで不登校を養育者や本人の異常な性格傾向によるものと見なし、登校強制を中心とする対策を採っていたが、1990年に出された学校不適応対策調査研究協力者会議の中間報告において、「どの子にも起こりうる」と認識転換を表明し、それまでの登校強制に代わって「心の居場所づくり」「見守る」などの対応が推進されるようになった。さらに2003年には、不登校者数の増加や階層化という視点の導入に伴って不登校を「進路の問題」とする見方が打ち出され、再び登校の促進が対策として提示された。
4. 鄭は、「たとえ、日本に民族差別の構造が厳然することを、白日のもとに照らし出し、差別に反対するために、自ら“在日韓国・朝鮮人”であるとカムアウトしたとしても」、それは差別者と同じ分類枠組みを使用することによって、そこに織り込まれた差別構造を再生産してしまうという。障害者運動と在日運動という磁場の相違もあるかもしれない。しかし、石川の分析に照らせば、鄭の分析には被差別者が差別者側の構造を反復する中で生じる意図的・非意図的なずれが考慮されていないように思われる。差別者側の分類枠にみずからを当てはめることが、差別構造の素朴な再生産であるとする考えは、被差別者による実践の、反復とずれによる構造の内破という側面を見ない過小評価ではないだろうか。

## 文献

浅野智彦(2001)『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』勁草書房。

Aさん(16歳) 東京シュールの子どもたち(編)(1991)『学校に行かない僕から学校にいかない君へ：登校拒否・私たちの選択』教育史料出版会, 5-7.

Bさん(21歳)(1998)「学校への自由／学校からの自由」『FINDS』(10月号).

————(22歳)(1999)「『選択』？」『不登校新聞』(3月15日号)

———— (25歳) (2002) 貴戸宛ての文章

———— (26歳) (2003) 貴戸宛ての文章

鄭暎恵 (1996) 「アイデンティティを超えて」井上俊(他)(編)『岩波講座現代社会学(15)差別と共生の社会学』岩波書店.

———— (1998) 「日本における定住外国人とマルチカルチャリズム」『岩波新・哲学講義(6)共に生きる』岩波書店.

石川准 (1996) 「アイデンティティの政治学」井上俊(他)(編)『岩波講座現代社会学(15)差別と共生の社会学』岩波書店.

荻谷剛彦 (2003) 『なぜ教育論争は不毛なのか：学力論争を超えて』中公新書ラクレ.

金泰泳 (1999) 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて：在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社.

小林貴裕・小林博和 (2002) 『「home」パンフレット』.

中西正司・上野千鶴子 (2003) 『当事者主権』岩波新書.

奥地圭子 (1989) 『登校拒否は病気じゃない：私の体験的登校拒否論』教育史料出版会.

奥地圭子 (2001) 『不登校を考える：子ども達との出会いから見えるもの』登校拒否を考える大田の会(2001年4月22日講演会資料).

大澤真幸 (1996) 「語ることの(不)可能性」『現代思想』24(5):292-304.

Plummer, Ken (1995) "*Telling sexual stories : Power, Change and Social World*", London, USA and Canada, Routledge = (1998) 桜井厚・好井裕明・小林多寿子(訳)『セクシュアル・ストーリーの時代：語りのポリティクス』新曜社.

東京シューレの子どもたち(編) (1991) 『学校に行かない僕から学校にいかない君へ：登校拒否・私たちの選択』教育史料出版会.

———— (1995) 『僕らしく君らしく自分色：登校拒否・私たちの選択』教育史料出版会.

山田潤 (2002) 「「不登校」だれが、なにを語ってきたか」『現代思想』30(5):233-247

受稿2004年6月25日／掲載決定2004年9月21日